

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

(1) 玄関に花を飾って、客を迎える。

(2) 返却された本を図書委員が整理する。

(3) 庭先から、梅の香りがほのかに漂ってくる。

(4) 見晴らしのよい尾根で、しばらく休憩する。

(5) 環境問題をめぐり、国際会議で議論が沸騰する。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書

で書け。

(1) 冷たいムギチャで、のどを潤す。

(2) 野外で、たぎぎをモやして料理を作る。

(3) オンダンな地方の農作物について、資料で調べる。

(4) 留学を終えて帰国した兄から、ユウエキな体談を聞く。

(5) 夏の日差しをアびて、子どもたちが浜辺を走り回っている。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

春美の母が住んでいた和泉村いずみむらの集落は、グムの建設によって水没してしまっていた。母は、水没をまぬがれた地域に小屋を建てて一人で生活していたが、村が豪雪に閉ざされる冬期には、春美夫婦や孫のさやかかの住む東京の家で暮らしていた。ある年の冬、母は骨折して入院し、退院した後も村には戻れなくなっ

隣室の母が、

「星を見るんか。」

と言った。母も、目覚ましで起きてしまったらしい。

「見えるかどうか、わからないけれど。」

「一万個も降るそうやから、東京でも見えるやろう。」

母は、ベッドから起き上がって言った。東京にいと、星が見えない、いつも言っているのだ。

手術はうまくいった、と病院では言っていたが、母はその後自分一人では歩けなくなっていた。昔の家は段差が多くて車椅子くるまいすが使えず、家族の肩にすがったり、杖つえをついたりしてかろうじて歩いている。春美は流星を見たいと言う母に肩を貸して、縁側に腰掛けさせた。

「おばあちゃん、そこでは軒が邪魔で見えないよ。」

(1) さやかが庭の真中に椅子を据え、春美とさやかは母の両脇りょうわきを支えて腰をおろさせた。

庭と言っても狭いし、周囲に家が建て込んでるので、見渡せる空は限られている。その上、流星を見ようということで近所の家々は起きており、電灯の明かりで星もはっきりは見えない。春美は星空を眺めたことなどなかったが、母が、東京では星が見えない、と言っていることが納得出来た。

「しし座というのは、どれなの。」

さやかに聞いてみたが、

「わからないわ。星と星を線でつないで何座なんてつけているけれど、どれとどれをつなげれば、何に見えるか全然わかんない。」

いくら強く光る星はあるが、それが何という星なのか、その星とどの星を結びと星座を形づくるのか、いくら目をこらしてみても、何の形にも見えない。しし座という星座は、いったいどれを指して言うのだろう。

一時間ばかり夜空を見上げていたが、流星は一つも見られなかった。

「こんなところでは無理ね、もつと空気の澄んだ山の上へのぼって、見渡す限りひろがっている空でない」と。

「和泉村なら、見えたやろうね。」

「そうねえ。お母さんの小屋のあるところは木が茂っているけれど、湖の周辺は広い空がひろがっているからね。」

「星がぎょうさん、うんと近くに見える。流星でのもうても、じいつと見ていると降って来るような気がするんや。」

(2) 母は、晴れているのにぼんやりかすんでいるような狭い空を眺めながら言った。

プラネタリウムへ行こう、と言い出したのは、さやかだった。星座がはっきりしないのは、東京の空だからだ。プラネタリウムなら、いろいろな星座が見えるだろう。おばあちゃんにも、星を見せて上げよう、と言う。

十一月も末の晴れた日曜日、雄策が三人を車に乗せ、母の車椅子も積んで渋谷へ出かけた。一人で外出出来なくなった母の慰安のためにいいプランで、家族四人の行楽としても久々のことであった。

文化会館にはショッピングのフロアーや映画館、食堂街もあり、四人は昼食をとると、そのままエレベーターで八階まで上った。前回の投影時間がまだ終わっていないので、それまでロビーや、円型の投影場を囲むようにぐるりと廻らされている廊下の展示物を見ることにした。壁にしつらえられているガラスケースの中には、望遠鏡の歴史を示す望遠鏡の模型や写真が展示され、古い中国や西洋の星座の拓本や絵、天球儀や隕石、太陽の周囲を廻る月と地球の模型など、さやかは熱心に見ている。今年をあてはずれだったが、三十三年周期で出現した過去の、文字通り雨のように降っているしし座の流星雨の版画や写真もあって、

「うわー、こんなに凄いいんだ。」

と、さやかは叫んだ。

(3) 「おばあちゃん、星が降るんじやなくて、地球が彗星の軌道を通り過ぎる時に、彗星がまき散らしているチリが発光するのよ。昔の人は、こんなに降ると、空に星がなくなっちゃうんじやないか、って思ってたんだって。」

さやかは、ノースカロライナ州で見られた一八三三年の流星雨を呆然と見上げている人々の版画を見ながら、母の車椅子にかがみ込んで説明した。

投影時間になって、四人は場内にはいった。日曜なので坐れないといけないと思って早めに来たが、意外に空席が目立った。

場内の中央に、丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻が肢を踏ん張ったような、黒い機械が据えられている。それを囲むように席が放射状に設けられていて、ドーム型の天井を仰ぎ見られるように椅子はリクライニングになっている。

ドームの下方の周囲には、東西南北の表示と、東京タワー、国会議事堂、絵画館、駒場東大などのシルエツトが、ぐるりと一周りして、西と南の間には、富士山が見える。

雄策は母を車椅子からおろして座席に坐らせ、ドームを仰げるように椅子を倒した。四囲の扉が閉められると、低目のやわらかい女性の声で、解説が始まった。(4) 西の空に太陽を示す丸い光が浮かび出し、西寄りななめに沈んでゆくにつれ場内は暗さを増してゆく。

太陽は、富士山の後方に没し、地平線が茜色に染まった。間もなく場内は闇に包まれ、座席も見えなくなった。天空には星が現れ始め、南の上方に半月が浮かんだ。

幻想的な音楽の流れる中で、女声の説明が続けられ、白い光の矢印が星を指す。

満天の星の中で、よく目立つ木星、土星が拡大されると縞模様や輪が見えた。ぼうつと帯状に見えるのがミルキウェイと呼ばれる

天の川だと説明があり、その部分が拡大される。北の空に輝く北極星も、春美はこれまで空を仰いで、星の中から見つけたことはなかった。

暗闇の中で仰臥の姿勢をして星空を仰いでいると、無重力の宇宙に放り出されたような、感覚を覚える。母は、星の名も、星座の名も知らないが、和泉村で星を仰いでいる時は、こんな感じなのだろうか。

星と星とを線で結んでWを示すカシオペアや、天頂にかかる四辺形のペガサス、おおくま、こぐま、アンドロメダなどの星座を矢印で示しながら、それにまつわる神話が語られる。その度に、美神や馬の半身や、怪物や、勇者の絵が天空に浮かび上がる。ただ大小無数の星が散らばっているとしか見えない空に、壮大な物語を描き出す古代人の空想力に、春美は驚嘆しながら一時間を過ごした。

半月が西の空に沈み、東の空が明るみ始めた。明るくなった場内を見廻すと、眠っている客もいた。快い眠りであったろう。

「お母さん、終わりましたよ。」

母も、心地よさそうに眼を閉じていた。

「いやだ、おばあちゃん、眠っちゃったの。」

さやかは、せっかく祖母に星を見せたいと思っていたのに、がっかりしたように言った。

ビルの外へ出るとまだ日は高く、日曜の繁華街はどこから人が集って来たのだろうと思っうほどの雑踏だった。

(5) 後部座席に坐ったさやかは、

「和泉村の星って、あんなにきれいに見えるの。」

とたずねた。

「ほうやねえ。」

と、母は曖昧に答えた。人工的に作られた星空と、母の思っている星空とは差違があったのだろう。

「だって、おばあちゃん、寝ちゃってたんだもんな。」

さやかは、少し不服そうに言った。

「ちゃんと見とったよ。流れ星も見たし。」

「和泉村でも、流れ星見た？」

「それは何度も見たよ。」

「流れている間に願いごとをするとかなえられるのよ。何をお願いしたの。」

「村では、星が流れると、いま人が亡くなったちゅうんや。」

母は、窓の外へ目を向けながら言った。春美は、大野市に移した肇の墓のことを思っているのだろうか、と思った。

(注) ぎょうさん——たくさん。 雄策——春美の夫。  
リクライニング——背もたれの角度を変えられる仕組み。

肇——九歳で病死した春美の兄。

(問1) さやかが庭の真中に椅子を据え、春美とさやかは母の両脇を支えて腰をおろさせた。とあるが、この表現から読み取れる

春美とさやかの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 楽しみにしていた機会がやっと訪れたので、早く空の見える

ところへ行くように、二人がそれぞれに「母」を促している様子。

イ 家の中にこもりがちに暮らす「母」が自分から進んで外に出

たくなるように、二人で協力しながら、力強く励ましている様子。

ウ 一人では思うように歩けない「母」をいたわりながら、望みが

ができるだけかなえられるように、二人して気を配っている様子。

エ 「母」が都会になじめないことを心配しながらも、それをさ

〔問2〕 母は、晴れているのにぼんやりかすんでいるような狭い

空を眺めながら言った。とあるが、この表現から読み取れる「母」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア かすんだ夜空の下で流星を見た話をして、自分の感動は伝わらないと感じ、周囲の人の反応に物足りなさを覚えている。

イ 東京の空とは比較にならないほど、数多くの星が間近に見える澄みきった故郷の星空を思い起こし、なつかしさを覚えている。

ウ 流星は見えなかったが、故郷の星空を思い出すだけで満足し、かつては自然の中で暮らせたことに強い喜びを覚えている。

エ 軒の間から見える夜空にずっと目をこらしていたのに、結局は流星が現れないので、やり場のないいきどおりを覚えている。

〔問3〕 (3)「おばあちゃん、星が降るんじゃないかと、地球が彗星の軌道を通して、彗星がまき散らしているチリが発光するのよ。

昔の人は、こんなに降ると、空に星がなくなっちゃうんじゃないか、って思ったんだって。」とあるが、さやかが「おばあちゃん」にこのように言ったわけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 故郷で見る星が一番だと言う「おばあちゃん」に、昔はもっとすばらしい星空があったことを教えてあげたかったから。

イ 流星雨についての自分の知識の豊富さを、この機会に「おばあちゃん」に認めてもらってほめられたいと思ったから。

ウ 投影の時間まで自分も「おばあちゃん」もすることがないで、いっしょに星空の話をして待ってしようと考えたから。

エ 流星雨の版画や写真を見ながら心の高まりを覚え、その気持ち「おばあちゃん」にも感じてもらいたかったから。

〔問4〕 (4) 西の空に太陽を示す丸い光が浮かび出し、西寄りななめに沈んでゆくにつれ場内は暗さを増してゆく。太陽は、富士山の

後方に没し、地平線が茜色あかねいろに染まった。間もなく場内は闇やみに包まれ、座席も見えなくなった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 場内に作り出される夕方の情景を、沈む太陽を表す光の描写と深まっていく闇の描写とを織りまぜて、印象的に表現している。

イ 夕日が地平線にゆっくりと沈んでいく情景に、壮大な宇宙の営みが暗示されていることを、順序立てて論理的に表現している。

ウ 人工的な美しさと自然の夕焼けのもつ趣とを対比させてとらえ、二つの情景を色彩豊かに描くことで、幻想的に表現している。

エ 一瞬のうちに変化する夕方の情景を、場内の観客の心の動きとともにすばやくとらえて、生き生きと躍動的に表現している。

〔問5〕 (5) 後部座席に坐ったさやかは、とあるが、あなたがさやかだとしたら、このあとに描かれた一連の会話から何を思うか。その思ったことを、「さやかが自分の思いを短い文章にしておばあちゃんに伝える」という設定で、相手の気持ちに配慮しながら五十字以内にまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

現代の社会に生きることは、その前の時代に比べて容易なのであろうか、あるいは難しいのであろうか。その答えはイエスでもありノーでもあると思われる。(第一段)

つまり、ある部分では確かに楽になっている。例えば私たちは機械文明の中に生きており、ボタン一つであらゆることができる。世界の出来事すら、ボタン一つでテレビを通じて知ることができる。

物が欲しいとき、真夜中でも自動販売機にお金を入れて手に入れることができる。かつて夜は文字どおり眠るための夜であったが、現代の夜は昼とあまり差がなく祝祭的ですからある。また、インスタント食品と電気器具によって、私たちは手を汚さずに食べ物を口にすることができるよう。つまり、今ほど便利な時代はないのである。(第二段)

そしてまた、現代ほど第三次産業の発展した時代はない。第三次産業の中でもサービス業の急速な展開は、ただ座っているだけで、あらゆるものが私たちの手に入るという、サービス過剰な社会を作った。(1)したがって、この面では極めて暮らしやすい時代である。私たちは生産主体から消費主体に移りつつある。現代青年は真正正銘の消費人間になっている。作るより消費する方がはるかに得意なのである。(第三段)

では、このような暮らしやすいサービスの時代は、はたして良い時代なのであるか。苦勞もしなくて、すべてが手に入る社会は、はたして良い社会なのであるか。文明というものは、多かれ少なかれプラスの裏に必ずマイナスが付き物であるが、現代の消費社会のプラス面が便利さであるとするならば、マイナス面は心が短絡的衝動的な人間を多く生み出す可能性であるといえよう。現代の青年は、生まれた時から豊富なモノとテレビなどの便利な電気製品に囲まれて育った。したがって、彼らの望みはまたたく間になえられたのである。しかし、彼らは小さい時からそれを喜ぶわけでもなく、当然のものとして生きていた。彼ら、消費主体の青年たちは、かつての生産主体の青年たちに比し、待ち、工夫し、努力し、作り、その末に何かを手に入れるということが苦手である。(第四段)

(2)人間がよかれとして作り上げている社会が、逆に未熟で衝動的で、待てなくても暮らせるような人間を作り出す。言い換えれば、消費社会は消費人間を作り出し、消費人間はまた消費社会を支える。

社会と人間の性格には、このような相関関係がある。したがって、このような社会を暮らしやすいとするか、暮らしにくいとするか、問われれば、確かに表面的には暮らしやすい社会になっているが、成熟しなくてもよいという社会は、ある意味では危うい社会であり、最終的には暮らしにくい社会に逆戻りする可能性をもつ、と答えざるを得ないだろう。(第五段)

私たちの社会は前の時代に比べてはるかに自由度が高く、それが自由な価値観をもって生きることができている社会である。自分の権利を自由に主張できる社会でもある。しかし、私たちは本当に自由であろうか。一九九〇年代の今は情報社会から高度情報社会への過渡期と考えられるが、情報社会とは私たちが何をしようか、何を考えようかと考える前に、既に情報が与えられている社会、と言いつ換えることができる。どうしたらいいのか、「ハウツー」のメニューをすべてそろえてくれ、私たちは出てくるメニューを選びさえすればよい社会なのである。それはよく考えれば、実に便利な社会ではあるが、別の観点から言えば、他のメニューがあるかもしれないではないかという選択の余地がないのである。あらかじめ送られてくる情報、特に欲望をそそる宣伝によって私たちが左右され、強制され、踊らされ、コントロールされ、統制され、そして画一化されている社会とも言えるのである。このからくりを日常的に知覚するのは容易な作業ではない。だれもが、すべてから自由な社会であるという錯覚に陥っているからである。(3)私たちは本当の主体性を確保

できる自由な時代に生きているとは、必ずしも言えないのであり、意外に難しい時代に私たちは生きているのである。(第六段)

というの、かつて私たちが規制したのは、国家思想とかイエの家父長制度というような、はっきりと目に見える権力とか規則やモラルであったが、今私たちが支配しているのは、そのようなはっきりと目に見えるものではない。個人主義という美名の裏で、情報と

いう「見えざる手」が大きな手を広げているのである。情報が電波に乗り、活字に現れ、それによって私たちは動かされている。そして、自分がどこまで動かされているのかすら、自分で確かめられないほどである。だとすると、現代ほど自分の主体性、価値観を築き上げるのに難しい時代はないのである。(第七段)

このように情報が蔓延し、渦巻のように私たちを巻き込もうとする社会の中で、青年たちはどのように生きようとしているのであるか。(第八段)

〔注〕 ハウツー——やり方。 モラル——道徳、倫理。

〔問1〕 (1) したがって、この面では極めて暮らしやすい時代である。とあるが、「この面」とはどういう面か。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 人々が互いにサービスを提供し合って生きているという面
- イ 最近になってあらゆる産業が急速に発展しつつあるという面
- ウ 特別な努力をしなくてもすべてのものが入手できるという面
- エ 消費中心の生活が人々に定着するようになってきたという面

〔問2〕 (2) 人間がよかれとして作り上げている社会が、逆に未熟で衝動的で、待たなくても暮らせるような人間を作り出す。とあるが、「人間がよかれとして作り上げている社会が、逆に未熟で衝動的で、待たなくても暮らせるような人間を作り出す」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 豊かな暮らしが当たり前になればなるほど、人間はそのような生活についていけずに消費社会に背を向けるようになる、ということ。

イ 社会が便利になるとかえって人間は精神的に成長せず、がまんも苦勞もしない生活を当たり前に思うようになってしまふ、ということ。

ウ 何でも簡単に手に入る社会が実現していくにつれて、反対に人間は際限もなくモノを消費することに飽きてしまふ、ということ。

エ せっかくモノが豊富になり便利な道具が普及しても、それらを活用しないで効率の悪い生活を送る人間が多くなる、ということ。

〔問3〕 (3) 私たちは本当の主体性を確保できる自由な時代に生きているとは、必ずしも言えないのであり、意外に難しい時代に私たちは生きているのである。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 現代の社会では与えられる情報によって行動や考えが方向づけられており、しかも人々はそのことになかなか気づかない、と考えたから。

イ 現代は個人が何かを始めようとしても、手に入る情報が多すぎるためにどれを選びよいか迷ってしまいがちである、と考えたから。

ウ 現代は人々の欲望がさまざまなため、それらのすべてを満たすだけの大量の情報が用意されることは難しい、と考えたから。

エ 現代の社会で流される情報に共通する考え方を調べても、それぞれが自由な価値観に基づいているので容易に分からない、と考えたから。

〔問4〕 第五段と第六段との関係を説明したものとして適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第五段で述べた内容について、第六段ではそのあらましを順序よく整理して分かりやすく解説している。

イ 第五段で述べた内容に対して、第六段ではそれに反対する意見を列挙して一つ一つ詳しく分析している。

ウ 第五段で述べた内容を受けて、第六段ではその根拠となる事例を付け加えて問題解決の手順を示している。

エ 第五段で述べた内容について、第六段ではそれまでとは異なる視点からとらえ直して論を展開している。

〔問5〕 この文章で筆者が述べている事柄や考えについて、あなたの考えたことを、具体例を交えて二百字以内にとめて書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や・やなども、それぞれ字数に数えよ。

5 次の文章は、蕪村の句と李白の漢詩について述べたもので、あとの〔 〕の中のaは、この文章に引用されている。「宇治行」の現代語訳、bは、漢詩「静夜思」の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

蕪村

その前書きによると、蕪村は秋の一日、弟子の几童と京都郊外の鳴滝に遊んでこの句を得たようである。句意は説くまでもあるまい。茸狩に興じているうちにいつか夕暮れとなり、ふと見あげると峰にかかる月がさやけく光を増していた、というのである。(1) 私にもそんな覚えがあるが、前後を忘れて茸をさがし求めていると、すっかり腰が疲れてしまう。そこで腰に手を当てる存分に頭を反らせ、「うーん。」と伸びをする。と、そこに峰の月がある。

蕪村はよく茸狩に出かけたらしい。没年の天明三年の秋にも門人の毛条に招かれて宇治に遊んでいる。それを記した短文「宇治行」によると、「宇治山の南、田原の里の山ふかく、茸狩し侍けるに、わかきどちはえものを貪り先を争ひ、余ははるかに後れて、こころ静にくまぐまさがしもとめけるに、昔の小笠ばかりなる松たけ五本を得たり。」とある。彼は子供のようによろこんで、つぎのような句を詠んでいる。

(2) 君見よや拾遺の茸の露五本

拾遺とはいうまでもなく拾いのこしのことであり、句意は「おい、みんな見ろ、お前さんたちはこんなに大きな松茸を五本も拾いのこしているではないか。」と得意になっているの図である。

だが、このときの夜露が老いの身にしみたのかもしれない。蕪村は帰ると間もなく病床につき、いくばくもなくしてその年の十二月二十五日の未明に世を去っている。

(3) ところで、「頭を挙げれば峰の月」という句であるが、蕪村の句としてはけっして佳句とはいえない。けれども、茸狩に興じつつ彼の胸中にどのような詩想が去来していたのかを忖度するにはなかなか興味深い一句である。おそらく彼のなかにはつぎのような李白の「静夜思」のイメージがあったにちがいない。

牀前月光を看る

牀前看月光

(4) 疑ふらくは是れ地上の霜かと  
頭を挙げて山月を望み  
頭を低れて故郷を思ふ

疑是地上霜  
举头望山月  
低头思故乡

この詩の「頭を挙げて山月を望み」が、そのまま「頭を挙げれば峰の月」となったのである。(5) その「峰の月」を仰いだとき、蕪村は会心の笑みを洩らしたことであろう。なぜなら、彼は李白とおなじ詩境に立つことができたのであるから。畏敬する詩人とおなじ詩境に立つよるこびを私も何度か体験した。だから私は蕪村がそのとき受けたであろう感慨を充分共にすることができるのだ。

このように、蕪村の詩囊に貯えられていたイメージの多くは中国の詩人たちの詩境であった。それは彼の句集のなかからいくらかでも拾い出すことができる。げんに彼は弟子の召波に俳諧を問われたとき、ただ一言、「詩を語れ。」と答えている。詩とは中国の詩、すなわち漢詩である。

(森本哲郎「月光と花影と」による)

〔注〕

茸狩——きのこを探ること。  
佳句——すぐれた句。  
茸狩(たけがかり)——きのこを探ること。  
寸度(せんた)する——推測する。  
詩囊(しなう)——詩を作る心。

a 宇治山の南の、田原の里の山深いところでのこ狩りをしたところ、若者たちは、えものをむさぼりとうとうとして先を争って行ってしまった。私ははるかにおくれ、心静かにすみずみをさがし求めると、菅の小笠ほどの大きさの松茸を五本とることができた。

(山下一海「蕪村の世界」による)

b 寝台の前にさし込む月の光を見て、地に降りた霜かと思つた。頭を挙げては山上の月を仰ぎ、頭を垂れては故郷のことを思いつづける。

(目加田誠「唐詩選」による)

〔問1〕 (1) 私にもそんな覚えがあるが、前後を忘れて茸をさがし求めていると、すっかり腰が疲れてしまう。とあるが、ここでいう

「前後を忘れて」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 慌てて

イ 夢中になって

ウ わくわくして

エ おろおろして

〔問2〕 (2) 君見よや拾遺の茸の露五本とあるが、この句の内容や表現について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 心ゆくまで茸狩を楽しんだ季節が移り変わるなごり惜しさを、あえて季語を用いずに巧みに表現している。

イ 若者たちが去って一人静かに松茸を探す安らいだ気持ちを、五音と七音のリズムを崩して余情豊かに表現している。

ウ 若者たちが見落とした松茸を見つけて無邪気に喜ぶ気持ちを、呼びかけの言葉を用いながら率直に表現している。

エ 若者たちと先を争い松茸を探し回った楽しい思い出を、最後の五音を内容的に独立させて鮮やかに力強く表現している。

〔問3〕 (3) ところで、とあるが、ここでいう「ところで」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア そのうえ

イ そうすると

〔問4〕 (4) 疑ふらくは是れ地上の霜かと思つたというのか。bの現代語訳を参考にして、どういう情景かを二十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

ウ それに対して

エ それはそうとして

〔問5〕 (5) その「峰の月」を仰いだとき、蕪村は会心の笑みを洩らしたことであろう。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 筆者には李白と同じ場所に立つて詩を作った体験が何度もあり、蕪村も山上で月を見て異境の地にあこがれた、と考えたから。

イ 筆者自身も蕪村と同様に山に登って月を見上げた体験があり、蕪村は中国の詩人の詩に胸を打たれる思いを抱いた、と考えたから。

ウ 蕪村は山上の月を凝視するたびに漢詩の中に表れる中国の詩人の豊かな才能をうらやんだ、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

エ ふと見上げたところに山上の月を見つけた蕪村が李白と同じ境地に至ったことに満足した、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

イ 筆者自身も蕪村と同様に山に登って月を見上げた体験があり、蕪村は中国の詩人の詩に胸を打たれる思いを抱いた、と考えたから。

ウ 蕪村は山上の月を凝視するたびに漢詩の中に表れる中国の詩人の豊かな才能をうらやんだ、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

エ ふと見上げたところに山上の月を見つけた蕪村が李白と同じ境地に至ったことに満足した、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

イ 筆者自身も蕪村と同様に山に登って月を見上げた体験があり、蕪村は中国の詩人の詩に胸を打たれる思いを抱いた、と考えたから。

ウ 蕪村は山上の月を凝視するたびに漢詩の中に表れる中国の詩人の豊かな才能をうらやんだ、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

エ ふと見上げたところに山上の月を見つけた蕪村が李白と同じ境地に至ったことに満足した、と筆者が自らの体験をもとに考えたから。

国語

1	(1) 飾って	(2) 返却	(3) 漂って	(4) 休憩	(5) 沸騰
---	---------	--------	---------	--------	--------

2	(1) ムギチャ	(2) モやして	(3) オンダン	(4) エウエキ	(5) アびて
---	----------	----------	----------	----------	---------

3	問1		問2		問3		問4	
	問5							

4	問1		問2		問3		問4	
	問5							

5	問1		問2		問3	
	問4					
	問5					

得点

受検番号

1 (計10点)		2 (計10点)		3 (計25点)		4 (計30点)		5 (計25点)	
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点
2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点
2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点

配点

国語

解答

- ㊦ (1) かざ (2) へんきやく  
(3) ただよ (4) きゅうけい  
(5) ふっとう
- ㊧ (1) 麦茶 (2) 燃 (3) 温暖  
(4) 有益 (5) 浴
- ㊨ [問1] ウ [問2] イ  
[問3] エ [問4] ア  
[問5] (省略)
- ㊩ [問1] ウ [問2] イ  
[問3] ア [問4] エ  
[問5] (省略)
- ㊪ [問1] イ [問2] ウ  
[問3] エ  
[問4] 月の光が寝台の前にさし込んで  
いる情景。  
[問5] エ

㊦ [漢字の読み]

(1)音読みは「裝飾」の「ショク」。 (2)借りた物を返すこと。 (3)音読みは「漂流」の「ヒョウ」。 (4)「憩」には「いこ(う)」という訓読みもある。 (5)煮えたつ、という意味のほか、激しく盛んになる、という意味もある。

㊧ [漢字の書き取り]

(1)「麦」の音読みは「麦芽」の「バク」。 (2)音読みは「燃料」の「ネン」。 (3)「温」にも「暖」にも「あたた(かい)」という訓読みがある。 (4)利益があること、役立つこと。 (5)音読みは「浴室」の「ヨク」。

㊨ [小説の読解] 出典；津村節子「流星」。

[問1] <情景の把握> 和泉村から東京に移り住んだ母は、故郷と比べて「星が見えない」といつも言っていた。そして、手術後も「杖をついたりしてかろうじて歩いている」状態であった。そんな母が「流星を見たい」と言ったので、その願いをかなえるために見る位置まで配慮し、いたわりながら春美とさやかは母を縁側に腰掛けさせたのである。

[問2] <心情の理解> 直前で母は「星がぎょうさん～気がするんや」と、星のたくさん見える和泉村のことを思い出している。流星が降っているはずなのに全く見えない東京にいて、それとは対照的な故郷の空を懐かしんでいるのである。

〔問3〕<文章内容の理解>東京に住むさやかも、たくさんの流星を見たことがない。だから、流星雨の版画や写真を前にして、感動のために胸を高ぶらせているのである。その感動を、流星が見たいと言っていた祖母に伝えるために、一生懸命に説明したのである。

〔問4〕<表現の理解>昼間から夜に変化するドームの情景が、太陽を示す「丸い光」や、夕焼けを象徴する「茜色」などによって効果的に演出されている。静かなゆっくりとした変化で、見ている者の心に深く刻みつけられていく様子が想像される。

〔問5〕<心情の理解>流れ星と人が亡くなることを結び付ける祖母の言葉は、さやかにとって意外なものであったろう。しかし、さやかは病死した肇のことを知らなかったにせよ、祖母の悲しい心情をその表情や様子から感じ取ったものと想像される。不自由な身体で、やむなく東京に暮らしている祖母から感じ取った悲しい気持ち、孫のさやかか慰めの言葉によっていたわったのではないかと考えられる。

四〔論説文の読解—社会学的分野—現代社会〕出典；町沢静夫「成熟できない若者たち」。

《本文の概要》機械文明の発達やサービス業の急速な展開によって、私たちの生活は便利になり、暮らしやすくなったといえる。しかし、そのためにかえて現代青年は、待ったり努力したりすることのできない消費人間になってしまった。また、現代は考えや行動を決定するとき、自分の好きなメニューを選べばよいだけの、便利で自由な情報社会でもある。だが、メニューとしてすでに情報が与えられているという点では、画一化されている社会ともいえる。自分がどこまで動かされているのか自分で確かめられない現代において、自分の主体性や価値観をもつのは難しくなっているのである。

〔問1〕<文章内容の理解>現代は第三次産業の発達した時代で、中でもサービス業は急速に発展した。だから現代社会は「ただ座っているだけで、あらゆるものが私たちの手に入る」という社会になったのである。「苦勞もしなくて、すべてが手に入る」という面では「暮らしやすい」社会なのである。

〔問2〕<文章内容の理解>機械やサービスが発達した現代社会は、便利で楽だという点では暮らしやすいといえる。しかし、現代の青年は、生まれたときから便利で楽な生活をしているか

ら、自分たちで苦勞して生産することなしに便利さを当然得られるものと考えている。「工夫し、努力し、作り、その末に何かを手に入れる」ということが苦手になっているのである。

〔問3〕<文章内容の理解>「情報社会」である現代は「既に情報が与えられている社会」ともいえる。自分で好きな情報を選びさえすればよいのだから、便利で自由だとも考えられる。しかし、「あらかじめ送られてくる情報」によって私たちがコントロールされているために、私たちは自由ではなく画一化されているのだ、と筆者は指摘している。さらに、そのからくりを日々の生活の中で見つけ出すのは、簡単なことではないということも指摘している。

〔問4〕<段落関係の把握>現代社会では、機械文明や過剰サービスの発達によって、表面的には暮らしやすくなった。しかし、そのために、未熟で衝動的な人間を作り出す、という現代社会のマイナスの面が、第五段落では指摘されている。続く第六段落では、現代社会を自由度が高く便利な「情報社会」としながらも、情報に選択の余地がないことを指摘し、画一化された社会だと述べている。どちらの段落も視点の違いはあるものの、現代社会の中で、今後青年たちが主体的に生きていくことがいかに困難か、ということについて述べているのである。

〔問5〕<作文>私たちは、現代社会の物質的な便利さや情報化を当然のことのように受け止めている。しかし、筆者は、現代社会の問題点を指摘して、暮らしにくい社会、自由のない社会であると述べている。その筆者の主張をふまえ、自分自身が筆者のいう「消費人間」に当てはまっているか、今の生活において不便さや不自由さを感じたことはないかなど、具体例を交えて考えを述べてみよう。

五〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典；森本哲郎「月光と花影と」。

《本文の概要》「茸狩や～」の俳句は、蕪村の句としてすぐれているとはいえない。けれども、どのような詩想があったかを推測すると、興味深い句といえるのである。この句の「頭を挙げば峰の月」は、李白の『静夜思』の「頭を挙げて山月を望み」をふまえているのではないだろうか。つまり、「峰の月」を仰いだとき、蕪村は李白と同じ詩境に立つことができたのではないかと考えられるのである。それは、私も畏敬する詩人と同じ詩境に立つ喜びを体験したこと

があるので、蕪村の感慨に共感できるのである。このように、蕪村は、中国の詩人の詩想に強く影響を受けた俳人であったのである。

〔問1〕<表現の理解>「前後を忘れる」は、何事が起こったのかもわからないほど夢中になっている様子を表す。

〔問2〕<俳句の内容理解>「君、見よや」は、「おい、みんな見ろ」という意味の呼びかけの言葉。みんなが見つけられなかった「大きな松茸」を、後れていた作者だけが探し当てた。その自慢する気持ちが、このような喜びの言葉になって表れたのである。

〔問3〕<語句の意味>「ところで」は、話題を転換するときの接続詞。蕪村が世を去ったという話から、「頭を挙げば峰の月」の句について話題を転換している。

〔問4〕<漢詩の内容理解>「寝台の前にさし込む月の光」が、冷たくきらきらと光っているのを見て、「地に降りた霜」だと思ったのである。

〔問5〕<文章内容の理解>筆者は、蕪村の「頭を挙げば峰の月」の句の状況が『静夜思』の「頭を挙げて山月を望み」の状況に相当するものだと推論している。それは、蕪村の弟子たちに対する「詩を語れ」という言葉からもわかるように、蕪村は中国の詩人たちの詩境に強く影響を受けていたからである。自分の尊敬する詩人と「おなじ詩境に立つよろこび」を何度も経験している筆者だからこそ、李白と同じ詩境に立っていた蕪村の感動が理解できたのである。

### ＝読者へのメッセージ＝

李白の『静夜思』のような漢詩を五言絶句といいますが、面白い決まりがあります。第二句と第四句の最後の文字は、「韻」をふまなければならないということです。「霜」の音読みは「ソウ」、「郷」の音読みは「キョウ」ですね。どちらも語の最後が「OU」という発音になっています。気を付けて見てみると面白いですよ。